

コラム 西洋古代史の泉 8

石膏模像と古代の復元

南 川 高 志

ドイツ南西部の大都市シュトゥットガルトから南へ30キロほどのところに、チュービンゲン市がある。地域間急行を使えば、シュトゥットガルトから40分ほどでチュービンゲン中央駅に着く。人口10万人弱というこの町に、創立が1477年のチュービンゲン大学がある（正式名称は、エーベルハルト・カール大学）。この伝統ある大学と大学の前身ともなった神学校は、天文学者ケプラー、哲学者ヘーゲルとシェリング、そして詩人ヘルダーリンらが学んだことで有名である。

市中にはネッカー川が流れる。この町と同様に古い大学で知られるハイデルベルクもネッカー川の河畔にあるが、チュービンゲンの方が上流にあるので、川幅は狭い。中央駅近くに架かるエーベルハルト橋から見える川の流れや河畔の景色は非常に美しく、多くの観光客が、詩人ヘルダーリンが長く暮らした「ヘルダーリンの塔」などをカメ



チュービンゲンを流れるネッカー川とヘルダーリンの塔（中央）

ラに収めようと集まっている。川にボートを浮かべて遊覧するのは、イギリスの大学町、ケンブリッジとオックスフォードのパント遊びと似ている。

私は、このチュービンゲン大学の古代史ゼミナールの教員と研究交流するために、幾度かこの大学町を訪ねている。歴史あるチュービンゲン大学に最初の古代史教授職が設置されたのは意外に新しく、1903年のことである。ゼミナールはヘーゲル・パウという名の建物に所在し、その専用図書室には、壁のあちこちに、この大学で教えた著名な古代史学者の写真がかけられている。1954年から古代史は歴史学ゼミナールの一分野となり、さらに2010年の学部改組の結果、哲学部の歴史科学専攻の一部となって現在に至っている。1963年から教授職は2つとなった。現在の正教授2名（ミーシャ・マイヤー教授、セバスティアン・シュミット＝ホフナー教授）はともに教授としては若く、還暦の私からすれば教え子といってよい年齢だが、業績、力量とも非常に優れている。

ただ、この欄で紹介したいのは、古代史ゼミナールではない。大学の博物館の方

である。この町のネッカー川と旧市街との間にある小高い丘の頂に、1078 年創建というホーエンテュービンゲン城 (Schloß Hohentübingen) がある。中世の城塞は、1606 年にルネサンス様式の館に建て替えられ、現在は、館のかなりの部分が大学の博物館となっている。1997 年に開館したこの博物館には、2000 平方メートルの広さに 4600 点の展示物が集められている。先史時代、古代エジプト、古代近東地方、そしてギリシア・ローマ時代の遺物とその主なコレクションである。特に各地の貨幣やギリシアの陶器の展示が充実している印象を受ける。



ホーエンテュービンゲン城の中庭

さて、遺物の展示を見終わった訪問者は、次に広い空間に展示された古代の彫刻の数々を見ることになる。古代ギリシアの

コレー（少女像）やクーロス（青年像）もあれば、「プリマポルタのアウグストゥス像」もある。全部石膏模像である。コレーは彩色されている。博物館の「騎士の間」と呼ばれるこの展示室には、19 世紀から収集されてきた古代彫刻の石膏模像がずらりと展示されているのである。その所蔵数は 350 ほど。普段そうした彫刻を目にする機会のない者には、そのリアルな仕上がりで古代を直接的に実感するだろう。

こうした石膏模像のコレクションは、ヨーロッパの博物館でしばしば目にする。私が見た中で最も規模が大きいのは、イギリスのケンブリッジにある古典考古学博物館 (Museum of Classical Archaeology) のコレクションである。ケンブリッジ大学古典学部 (Faculty of Classics) の建物の階上にあり、450 点以上もの石膏模像を所蔵・展示している。ギリシア・ローマ時代の有名彫刻が実物大でずらりと並ぶ光景に、1996 年初めてここを訪ねた私は、本物ではないと知りつつも、不思議な感動を覚えた記憶がある。

ケンブリッジ大学は 1879 年、学位を授与する古典学の一部として、古代美術とギリシア・ローマ考古学を新たに加えたが、そこでの講義に石膏模像が必要となった。1884 年に創設されたこの博物館は、まずは教育のための施設であった。現在もこの点は変わらず、様々な教育活動に使われている。加えて、ケンブリッジ大学古典学部では、学会や教授就任特別講演の後にこの博物館でレセプションをおこなっている。2006 年 9 月古典学部教室を会場に開いた京都大学文学研究科主催のシンポジウムの時も、この博物館をレセプションの会場として使わせていただいたが、初めて博物館に入った京都大学の教員の幾人もが、古代彫刻の名作がずらりと並ぶ不思議な空間に驚きの声を上げた（博物館内の様子を紹介する写真を掲載できないので、テュービンゲンについてもケンブリッジについても、それぞれの Web サイ

トを見ていただけると幸いです)。

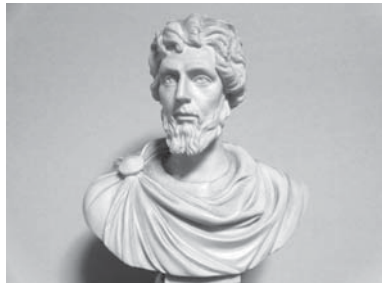
こうした石膏模像は、所詮レプリカだといわれればその通りではあるが、本物にはできない古代の復元を可能とする。そのひとつが着色である。古代の神殿や彫刻は着色されていたが、出土した本物の彫刻に彩色して古代を復元することはできない。しかし、模像なら可能だ。ケンブリッジ大学の古典考古学博物館には、コレー(少女像)の着色されたものがあって、白い像のままでは感じることの出来ないリアルな古代を教えてくれる。こうした展示は、オックスフォードのアシュモリアン博物館でも多用されているし、ウィーン的美術史美術館でも、古代ギリシアの復元のために模像がいくつも着色されているのを見た。

石膏模像による古代復元の試みは、神や人の像だけでなく、例えばローマ市に残る、ダキア戦争の情景を描く浮彫が施されたトラヤヌス記念柱のような巨大なものにまで及んでいる。石膏模像は、教育用ばかりでなく、研究用、鑑賞用など様々な方途に用いられてきた。今後は、CGの技術によって新たな古代の復元が進展するのであろうが、私のようなアナログ人間には、石膏模像の空間が与えてくれる古代の復元が心地よい。

ケンブリッジ大学古典考古学博物館が与える情報によれば、こうした石膏模像は、19世紀イギリスの有産者の所蔵であったものが多く、さらにそうした模像は、より以前になされたいわゆるグランド・ツアーの機会に買い求められた。つまり、石膏模像は古代史だけでなく、近代イギリス史の資料でもあるわけだ。こうした模像はヨーロッパで相当の数作られたものと思われるが、多くが破却された。今日博物館に所蔵されているものは、レプリカといえども貴重品なのである。

ところで、33年前のことになるが、初めてローマを訪れた私は、土産にローマ皇帝のたいへん小さな石膏模像を買った。それは、私が修士論文で扱ったセプティミウス・セウェルス帝の上半身像であった。勉強机の上に飾って、研究意欲をかき立てようと考えたのである。帰国して空港の税関検査の時、職員にスーツケースを開けて土産物を見せるようにいわれた私は、包みを開いてこの皇帝の模像を取り出した。すると、何と首が折れていたのである。

うろたえる私を見て、税関職員は同情した顔つきで「もう結構です」と言った。帰宅して、私はすぐにこの皇帝像を接着剤で修繕した。今もこの像は、私の家の飾り棚の奥に保管されている。セプティミウス・セウェルス帝は厳格で強い皇帝と一般に解されているが、この「事件」以来、私にはこの皇帝が何となくひ弱に見えるようになった。



わが家の皇帝セプティミウス・セウェルス像

